

# 中世山城跡の近世遺物

堂 込 秀 人

Relics of the Edo Era Excavated from a Hill Fort in the Middle Ages

Dogome Hideto

## 要旨

県内に841か所現存しているという中世山城跡が発掘調査の対象とされてきて、そのうちいくつかの中世山城跡で近世の遺物が出土している。シラスの削り出しにより作られることの多い南九州の山城跡が、全てではないが現在まで良く保存され、「城山」などと呼ばれ地域の文化財として認識されていることは、幕藩体制下の外城制と関わっているのではないかと考えた。元和の一国一城令以後、廃城されたはずのこれらの中世山城跡が、有事の際には即応できるようになっていたとすれば、外様の雄藩である薩摩藩のしたたかさをうかがうことができる。

キーワード：一国一城令 外城制 御城内山留役

## 1 はじめに

中世山城跡の発掘調査は、近年文化財保護の観点から進められるようになり、なお現在も範囲確認や保護施策の前段階としての発掘調査や報告書作成が、知覧町知覧城跡、高山町高山城跡、東郷町の鶴ヶ岡城跡、上屋久町楠川城跡、誦娃町誦娃城跡と進められている。宅地造成やシラス取りで、常に破壊の対象となりやすい城跡が、事前に発掘調査されるようになったことは、本県の埋蔵文化財保護の質的な転換の象徴的な事例である。対処療法的な埋蔵文化財保護行政からの脱却である。こうした発掘調査に取り組む市町村の進んで来た道は厳しく、そして今後の歩む道も決して安易ではないが、とにかく一步踏み出したということである。これらの発掘調査の企画から携われて来た文化財担当者はもちろん、それ以外の周囲の方々の理解・支援がなければならぬことであり、その労苦に対しても心から敬意を表するものである。

さてそれらの成果は着実にあがり、考古学的な成果も大きいものであるが、今回は中世に築城され、使用され、元和の「一国一城令」により廃城したはずの中世山城跡から出土する近世の遺物について考察したい。筆者も串木野城跡の発掘調査に携わったときに、竹林で覓れてはいたが、曲輪や土塁がよく保存されていて、串直に「どうして廃城後には400年たっているながら、こんなに残りがいいのか」という疑問が生じた。地主でもあり発掘調査に協力していただいた奥田氏や肝付氏の話や作業員として協力していただいた麓の皆さんの話を聞いてみて、城跡への侵入口は奥田氏と肝付氏の住宅のすぐ近くにあり(第1図)<sup>1)</sup>、だれでも入られる状況ではなかったこと、城跡を通して自らの祖先の人々への敬意と住んでいる土地の歴史性への関心の高さを知った。つまり一朝事が起これば、すぐにでも使える城跡

であるのだ。これは教科書的には、幕府の武家諸法度に反し、徳川幕府の諸施策からは信じられないことであった。軍事にも関わるこうしたことは、口伝されてきても文書としては残らないのが常識であろう。史料がなければ、まさに考古学的な手法が生かされる。ここでは、発掘調査を中心として、中世山城のその後について考察するものである。

## 2 鹿児島の中世山城跡の研究概略(文中は敬称略)

中世山城跡の研究史は詳しくは三木増による「研究資料よりみた本県の中世山城跡」<sup>2)</sup>にまとめられている。近代に多くの郷土史家によって戦国の人物研究からのアプローチがあったが、ここでは中世山城跡という遺構に絞り、近年のものを中心としておもなものを述べさせてもらいたい。中世山城跡の調査は、史料研究と縄張り研究、発掘調査の3つの柱があると考えられる。

史料研究においては、五味克夫が伊作城跡をはじめとして、建昌城跡などを取り上げ、県・市町村教育委員会の実施する発掘調査の多くにも、史料からの考察をおこなった<sup>3)</sup>。城に関係する史料と、その地域の同時代の史料をあげて、はやくから発掘調査の成果と比較検討されながら、周辺地域の歴史像を説き明かして、中世史への位置付けをおこなった。このほかに中野翠による高山城や南郷城の研究や<sup>4)</sup>、三木増による平山城の研究などがある<sup>5)</sup>。河野治雄は、近世までの史料を検討し、谷山城と地域の歴史を語っている<sup>6)</sup>。このなかで河野は、発掘調査の成果から、「外城」とよばれる近世の麓の、「谷山郷」へ地頭所が移るまで、近世前半に山城である谷山弓場城を使用していた時期があったと述べている。

縄張りについては1932年に林吉彦が清水城跡を中心とする研究<sup>7)</sup>の中で、清水城跡、東福寺城跡、高山城跡などに